スレイユ

パリ通信

「パリへ！パリへと……」

板谷房

所はヨーロッパもずっと北欧のスエーデン。ストックホルムから程遠からぬ、とある村はづれ。麦の穂もそろそろ熟して、野にはヒバリがさえづっている田舎道を三人の娘がテクテクと歩いている。テイラーと、マリエヌと、ルユーボンヌと呼ぶこの娘たちは、スエーデンはボン・フオールムと云う町の女学生。夏のバカンスを利用して、パリ見物の無銭旅行を思い立ったのである。着替えの衣類などを入れた小さなスーツケースを持っただけの軽装。心も軽く身も軽く、懐中の金もいたって軽い。つぎの街に入ると三人は大通りのガソリン・スタンドを見つけて、そのそばにしばらく立っている。とハイヤーを飛ばして来た中年の紳士がスタンドに車を止めてガソリンを補給している。娘たちは、その紳士に話しかけてその車の行く先まで乗せてもらう。また田舎道をテクテクとパリへ向って歩いていく。と後からハイヤーが来る。トラックが来る。娘たちは、車の人がどんな人であろうとへいちゃら、手を上げて車を止めて、車の行く所まで乗つけてもらう。つぎつぎにこんな方法をを取って、三人の娘は一銭の旅費も使わずに、とうとうパリに辿り着いたのである。

阿波の鳴門の「巡礼お鶴」ほどのことも無かったろうが、それでも教会のお堂に、こつそり一夜を明かした苦労も有ったとか。三人共英語が話せる。スエーデンからデンマルク・ドイツ・ベルギー・フランスと、何処の国に入っても英語が話せれば大丈夫だわとおっしゃる。

パリに来た彼女たちは、パリの滞在費を考えねばならぬ。だが女なればこそ、それも心配ないのである。夏のパリ、キャトル・ジュイエも真近かなパリは、パリ見物の田舎娘が多い。それをねらっている狼連も多い。三人の娘がモンパルナスのカフェのテラスでコーヒーを飲んでいると、すぐに四、五人の男たちが話しかけて来た。娘たちもそれを待って居たのである。それぞれ相手をきめて友だちになった。パリ名所の案内はして呉れるし、食事もさせて呉れる。夜はその男のホテルに泊めて呉れるので一銭の金もいらない。代価は？　娘の貞操である。娘たちもそれは始めから承知

の上の行動である。娘たちは、一ヶ月半の滞在中一銭の金も使わなかった。そして、パリの秋は早い。マロニエの並木に淋しい落葉が散り、セーヌの河原に秋風が身にしむ頃、スエーデンの親もとへ何食わぬ顔して帰るのだが、帰りも来る時の方法で帰るのである。が一人の娘、ルユーボンヌは安南人の美青年と別れられなくなり、とうとう故国に帰らず、パリに愛の巣を作るとか。

世にパリを「恋の都」と云うのである。これは、スエーデン娘にかぎらず、ドイツ娘でも、イタリア娘でも、或は、イスパニヨールでもキャトル・ジユイエ（巴里祭）が近づくと、夏休みを利用して、こんな方法でパリへパリへと、見物にやって来る。男はそうはうまく行かぬ、女なればこそである。もし日本が陸つづきであれば、かかる勇ましき女性なきにしもだろうが、いかんせん五ッの海をへだてた島国。いかにパリに憧がれたとて……ああ、日本娘よ幸なるかな。（在パリ、画家）